

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	大西 祥恵
論文題目	モダニズムの胃袋 Virginia Woolf と 同時代の小説における食の表象
論文審査担当者	主 査 武田美保子
	審査委員 中村 紘一
	審査委員 佐伯 恵子

モダニズム作家は、エドワード朝期の作家たちによる、過度に外的な描写を重視する従来の小説作法に対して、人間の内的・心理的な描写に重点を置くと考えられてきた。その代表的な作家であるヴァージニア・ウルフはとりわけ、登場人物をよりリアルに捉えるための技法として「意識の流れ」手法を導入したことで知られている。しかしながら実際には、「心と体や脳は融合して」おり、別々に仕切り分けることができない、という彼女自身の発言にもあるように、こうした作家たちは、単に内的心理を重要視するに留まらず、内的なものとの外的なものとの調和をこそめざしたのだと考えることができる。本論文は、身体性や物質性と心理的なものとの調和的な関係を探り提示しようとするに際して、非常に重要な機能を担ったのが食の表象であったのだとする。それゆえ本論は、食の表象が両者の調和を模索する際にいかに重要な役割を果たしているかという点を立証しようとするもので、食の表象に着目しながら、説得力のある分析を展開している点を、まず評価しておきたい。

本論は、序論と結論を除けば、全部で4章からなる。ここで、最も多く論じられているのがヴァージニア・ウルフの小説であるが、前半の2つの章では、ウルフの小説を限定して扱い、後半ではウルフとその同時代のモダニズム小説の共通点に焦点を当てて論じている。

第1章「Virginia Woolfの「食べ物に対するコンプレックス」」の第1節「*Mrs Dalloway*における食事療法 Virginia Woolfと摂食障害」は、当時精神を病んでいたウルフが治療として受けていた「安静療法(rest cure)」と摂食障害気味であった彼女の食べ物に対するアンビヴァレントな思いが、『ダロウェイ夫人』のテキストにどのように反映しているかについて論じる。伝記的な要素をテキスト解釈に織り込む際の難しさを感じさせられるものの、興味深い議論となっている。

第2章「Virginia Woolfにおける食の政治学」は、フェミニストとして知られるウルフの、食を通して示されるジェンダー・ポリティクスについて論じている。第1節「*To the Lighthouse*の中の「食べられる女たち」」では、『灯台へ』の中の食の表象を分析することで、子供の精神的な成長と食との関わりや、男性と女性にとっての食の持つ意味の相違などを明らかにする。第2節「*Orlando*と*A Room of One's Own*にみる「教養に裏付けられた食い意地」」では、ウルフの小説やエッセイの中で書くことと食べることが結びつけられていること、またそこでの「食べる女性」の描写が、ヴィクトリア朝的な家庭内天使像からの解放と精神的自立を果たす女性の表象となって

いることを論証している。基本的な構図に関する重要な指摘を含んでいるが、第1節の議論は図式的に過ぎるくらいがあり、もう少し丁寧な解説が必要であろう。

第3章「モダニズムの食卓」では、モダニズム小説を通して、家事使用人の数が激減する20世紀イギリスの台所事情と当時の階級制度や性役割の変化を読み解いていく。第1節「モダニズムの「料理男子」」では、現代日本の「料理男子」現象に言及しながら、モダニズム小説の中の料理をする男性の表象を分析し、20世紀初頭のイギリスの家庭で起きた家事労働をめぐる変化について検証する。「使用人問題」の影響のもと、中産階級の家庭で家事をする女性の数が増え始めた時代に書かれたモダニズム小説の中では、女性のために料理をする男性の描写が見られるようになる。具体的には、E.M. Forsterの*Howards End*とD. H. Lawrenceの*Lady Chatterley's Lover*、James Joyceの*Ulysses*を挙げ、こうした男性像の登場は、ヴィクトリア朝的な社会制度の揺らぎや性役割の変化の反映だとする。第2節「Virginia Woolfの台所」では、ウルフの二人の料理人とウルフとの関係に注目することで、当時の家庭で深刻になっていた「使用人問題」や彼女の料理人たちがウルフの創作に与えた影響を示す。隔たった時代を同一レベルで論じようとする第1節は、もう少し提示の仕方に工夫がほしいところだが、全体の論考は示唆に富む。

第4章「色と味と匂いのハーモニー モダニズム小説の中の感覚表現」では、モダニズム小説の中の感覚表現の重要性やそれと食の表象との関わりを考察する。第1節「『ダロウェイ夫人』の色使い」は、ウルフの色彩描写を通して、彼女の視覚表現を分析している。第2節「味覚の記憶 *Ulysses*の“Calypso”における食べ物の消化と記憶のインターテクスチャリティー」では、ジョイスの『ユリシーズ』第4挿話「カリプソ」を通して、記憶と味覚などの感覚との関わりについて述べる。第3節「*Flush*における女性と動物との絆と匂いの美学」では、犬を主人公としたウルフの小説『フラッシュ』の匂いの描写に注目し、犬と女主人の深い絆と愛情がその食欲とも密接に関わっていること、また犬の知覚手段となっている匂いを言語化するというウルフの実験が見られることなどが指摘されている。

本論文は、これまでほとんど顧みられることのなかった、ウルフを始めとするモダニズム作家の小説における食の表象や感覚表現に注目し、物質性がいかに精神的なものとも深く関わっているかを具体的なテキスト分析のなかで論じており、時に説明不足で図式的すぎるところも見受けられるが、その議論は概ね説得力がある。またそのテーマは、独創的で評価に値する。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに適確であると判断する。